

## 心大血管理学療法の近未来予測

名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻 山田 純生

本邦における心大血管理学療法は、学会テーマにある50年には及ばないものの、過去30年で大きく変貌した。再還流療法(PCI)に代表される急性期治療や心臓外科手術などの治療技術の普及・発展は、術後の早期離床・入院期間の短縮を推し進め、心大血管理学療法の目的を臥床の弊害改善から再発予防へと大きくシフトさせた。また、病診連携や急性期医療の充実などの医療システム改革は、心大血管手術のセンター化を促すと同時に、紹介病院への迅速な逆紹介が行われるようになった。しかしながら、皮肉にも早期退院・復職を可能とするこれらの流れは、外来リハ通院への参加機会を失わせる一因となっており、冠動脈疾患再発や心不全発症などの危険性が高いまま日常生活へと復帰しているのが実状である。

これらの冠動脈疾患に加えて、現在では、加齢や動脈硬化の進展

とともに発症する心不全患者も心大血管理学療法の対象となった。心不全は様々な要因で急性増悪をきたすことより、急性増悪因子の改善(再入院予防)を主目的の一つとするべきであるが、虚弱を示す症例では日常生活の自立がゴールとなっている場合が多く、再入院予防に向けた教育介入の取り組みは未だに普及していないのが実状である。我々の調査結果でも、心不全入院をきたした患者の1/3が再入院であり、再入院率は依然として高い。

2025年問題を考えるまでもなく、高齢社会の進行と相まって、心大血管理学療法の対象は増加する一方である。近未来社会の要請に応えるためには、どのような臨床を目指し、自らをどのように変革すれば良いのか。本講演ではその解を技術革新と研究に求めて考えてみたいと思う。

## 女性アスリートのからだと健康管理

国立スポーツ科学センタースポーツクリニック  
能瀬さやか、土肥美智子、川原 貴

近年、女子競技の拡大や女性アスリートの活躍も影響し、競技スポーツに参加する女性のみならず、スポーツを熱心に行う一般女性も増加している。女性アスリート特有の問題を「障害予防」と「コンディション」という観点から考えてみると、今後取り組むべき課題は多い。

「障害予防」の点では、女性アスリートの三主徴である「無月経」、「エネルギー不足」、「骨粗鬆症」が問題となる。この三主徴は、2007年にアメリカスポーツ医学会が定義しており、無月経による低エストロゲンが長期間続くと疲労骨折等の障害のリスクを高めることから、産婦人科医が介入すべき問題の1つである。また、骨密度への影響のみならず無月経により妊娠能や精神面等へも影響が出る可能性がある。しかし、月経がないほうが楽と考えているアスリートはまだ多く、今後、アスリートに関わるスタッフを含めた教育・啓発活動が必要である。

「コンディション」の視点から考えると、月経困難症や月経前症候群はコンディションやパフォーマンスに直接影響を与える疾患である。また、月経周期に伴う心身の変化を自覚しているアスリートは多く、国立スポーツ科学センターで683名のトップアスリートを対象とした調査でも、91.0%のアスリートが月経周期とコンディションの変化を自覚していた。しかし、婦人科受診歴のあるアスリートは4%であり、これらの問題に対し十分な対策がとられていない。今後、月経対策を行うことでコンディションやパフォーマンス向上につながる可能性は十分にあり、最近活躍が目立つジュニア世代からの対策が必要である。

今回、当センターで行った調査結果をもとに三主徴に対する対策やコンディション調整を考慮した月経随伴対策を中心に概説する。